

万博公園05年春の渡り鳥調査結果

(調査期間 05. 4. 15～5. 5)

製作：吹田野鳥の会

協力：独立行政法人日本万国博覧会記念機構

①はじめに

1) 野鳥は生態系の頂点において自然環境を表す指標となっており、どんな鳥がいるかでその環境がわかります。万博公園の野鳥については日本野鳥の会の定例探鳥会などにより、毎月1回以上確認・観察しているが、月1回の探鳥会では全体像がつかめない「春の渡り鳥」について、4月中旬～5月初旬に連日集中調査を行うこととし、03年にスタートし3年目となります。

2) 調査する春の渡り鳥

- ①ヒタキの仲間（ツグミ科・ウグイス科・ヒタキ科の鳥）
- ②ハタオリドリ科ニューナイスズメなど山野の鳥
- ③コチドリなど水辺の鳥



センダイムシクイ

3) 調査の目的

- ①これら渡り鳥が好む植生環境がわかれば、今後渡り鳥が利用する環境を創生するための園内植生管理の基礎資料になる
- ②大阪城公園などに比し万博公園で観察できる渡り鳥が少ないと言われている原因を知りたい

② 05年調査結果概略 ヒタキの仲間

05年ヒタキの仲間の渡りは04年・03年に比較すると、種数が減少、個体数が増加となった。

・種数 **05年6種↓** ← **04年10種、03年10種**

ツグミ科 1種 (アカハラ)

ウグイス科2種 (エゾムシクイ・センダイムシクイ)

ヒタキ科 3種 (オオルリ・キビタキ・コサメビタキ)

・個体数 **05年75羽↑** ← **04年41羽、03年57羽**

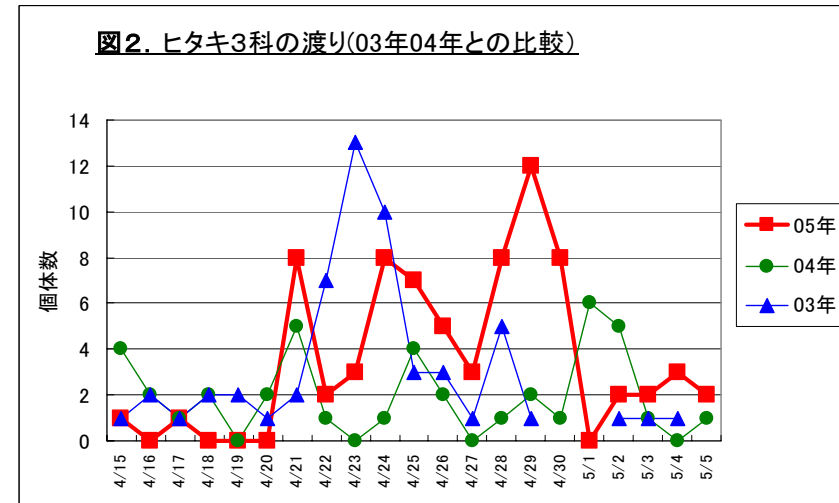
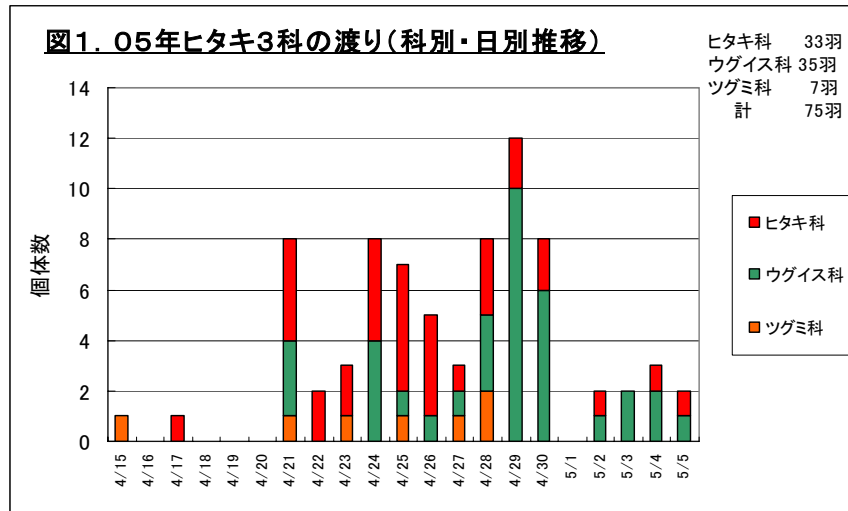
ツグミ科 7羽 (アカハラのみ)

ウグイス科35羽 (センダイムシクイ25羽・エゾムシクイ10羽)

ヒタキ科 33羽 (オオルリ19羽・キビタキ13羽・コサメビタキ1羽)

・種数減少・個体数増加が、たまたま万博公園だけか、他の公園でもそうなのか、わかっていない。

③ヒタキの仲間を観察した日と個体数計



・渡り鳥の多いピーク (図2)

03年 4月23日前後に大きなピーク1回のみ

04年 期間を通じ中ピークのみ(5月に入っての中ピークはウグイス科の鳥)

05年 ピークは3回、4月21日・24日はヒタキ科・ウグイス科、4月29日はウグイス科

- ・05年の個体数増は図1、図2から4月末にウグイス科を中心とする鳥の渡りが多かったことによる。
- ・04年・05年の結果からウグイス科の鳥は、ヒタキ科よりも渡りが幾分遅いことがわかった。

④ヒタキの仲間の種別個体数(年別)

・トータル種数・個体数

05年 6種 75羽

04年 10種 41羽

03年 10種 57羽

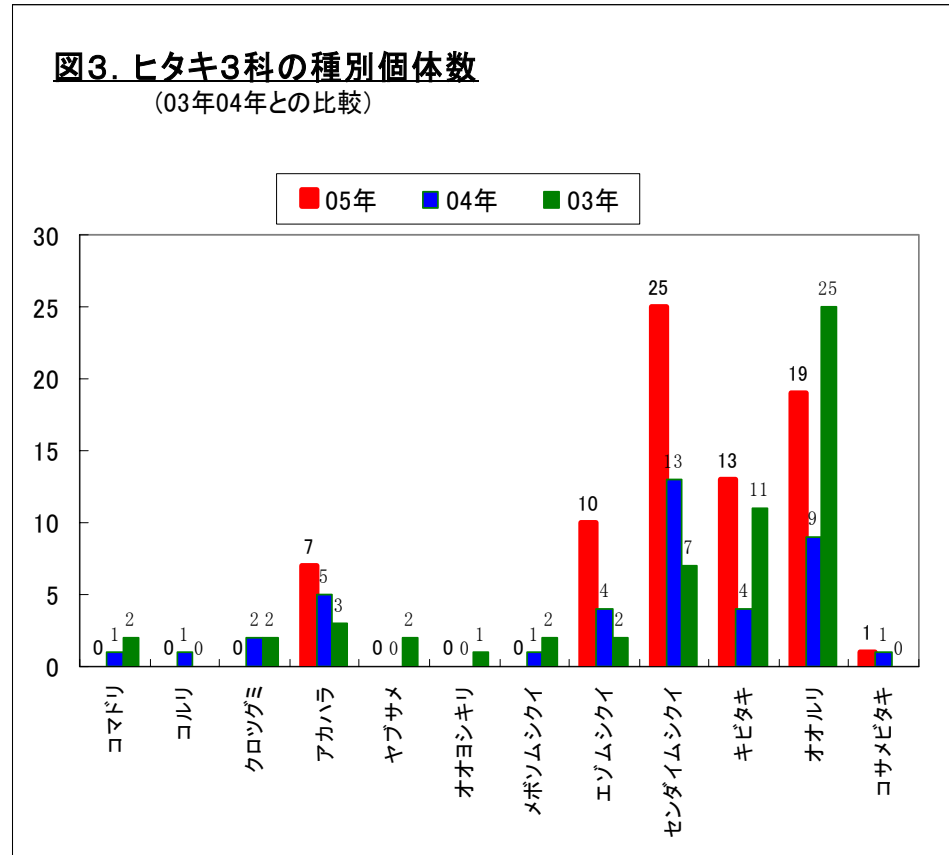
- ・ 図3より05年個体数増加はセンダイムシクイ・エゾムシクイの増加、キビタキ・オオルリの回復による。
- ・ 一方、05年種数減少は、04年に観察できたコマドリ・クロツグミ・メボソムシクイなどが、05年に観察できなかったことによる。
- ・ 3年間のデータは微妙に変化していて、このデータだけでは結論は出せない。

注) ヒタキの仲間 (図3種名の科名との関係)

ツグミ科 コマドリ・コルリ・クロツグミ・アカハラ

ウグイス科 ヤブサメ・オオヨシキリ・メボソムシクイ・エゾムシクイ・センダイムシクイ

ヒタキ科 キビタキ・オオルリ・コサメビタキ



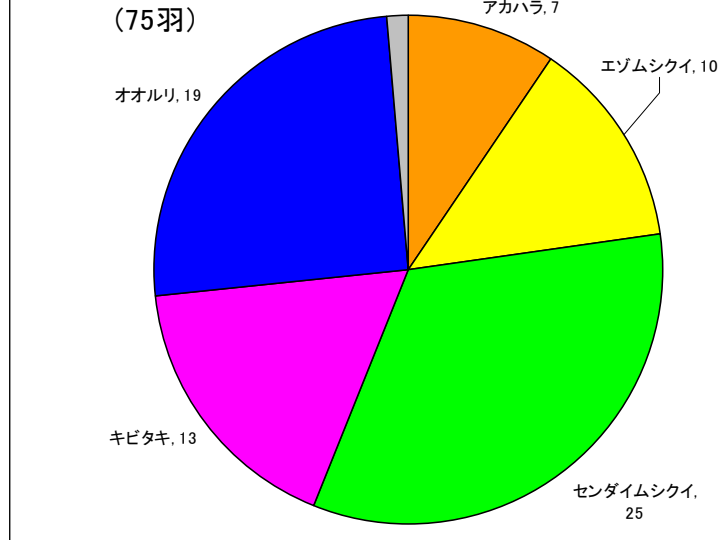
⑤ヒタキの仲間の種別個体数（円グラフでの比較）

03年はオオルリが多く、全体の44%を占めた。しかし04年は個体数が激減し比率も21%にダウン、05年に個体数はかなり戻したものの、比率は25%に止まった。

04年からセンダイムシクイが最も個体数の多い種となり、04年・05年とも約1/3を占めている。

次に多いキビタキは、10～20%で変化している。

図6. 05年春の渡り鳥



	03年	04年	05年
オオルリ	25	9	19
キビタキ	11	4	13
センダイムシクイ	7	13	25

図4. 03年春の渡り鳥 (57羽)

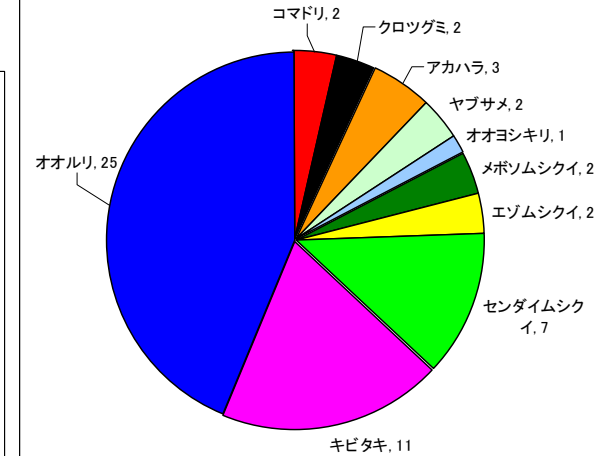
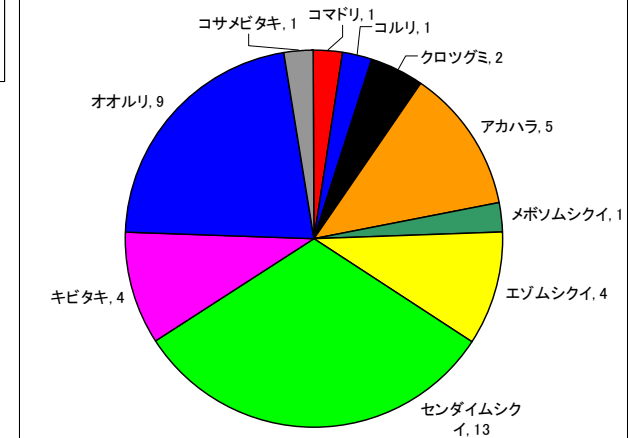


図5. 04年春の渡り鳥 (41羽)



⑥ヒタキの仲間以外の鳥（コチドリとニューナイスズメ）

・チドリ科 コチドリ

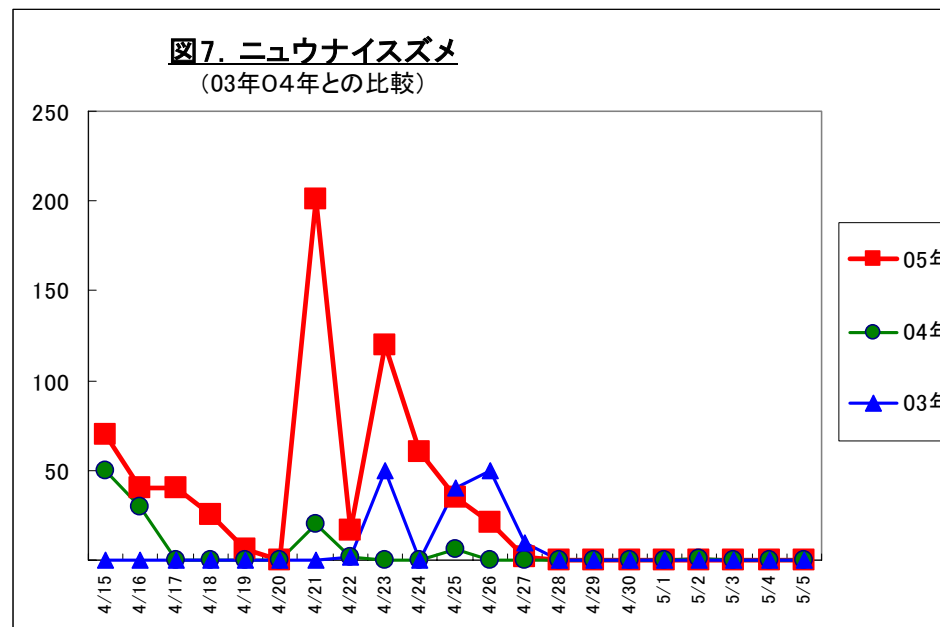
調査開始初日 4/15 から1～3羽のコチドリがほぼ毎日観察され、延べ12回24羽確認した。同一個体の長期滞在か、入れ替わっているのかの個体識別はできていない。

また、コチドリ以外のシギ・チドリの仲間ではシギ科のクサシギ1羽、4/21に観察している。

・ハタオリドリ科 ニューナイスズメ

03年の調査でスズメの仲間、ニューナイスズメの群が万博公園を通過していることがわかった。03年・04年は50羽程の群れが何回か確認したレベルであったが、今年（05年）は200羽を超えた日（3群）もあった。調査開始日 4/15 から約2週間、日により異なるが、最小1羽～最大100+ α 羽の群まで園内の林や、街路で観察し、トータルで637+ α 羽カウントした。

（04年109+ α 羽、03年152+ α 羽）



①春の渡り鳥基礎データ (表1)

			4/15	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	4/30	5/1	5/2	5/3	5/4	5/5	計			04年 比増 減
			金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	05年	04年	03年	
1	ツグミ科	コマドリ																						0	1	2	▲1
2	ツグミ科	コルリ																						0	1	0	▲1
3	ツグミ科	クロツグミ																						0	2	2	▲2
4	ツグミ科	アカハラ	1						1		1		1		1	2								7	5	3	+2
5	ウグイス科	ヤブサメ																						0	0	2	0
6	ウグイス科	オオヨシキリ																						0	0	1	0
7	ウグイス科	メボソムシクイ																						0	1	2	▲1
8	ウグイス科	エゾムシクイ							1			2	1		1	1	3					1		10	4	2	+6
9	ウグイス科	センダイムシクイ							2			2		1		2	7	6		1	2	1	1	25	13	7	+12
10	ヒタキ科	キビタキ								2	1	1		3	1		1	2				1	1	13	4	11	+9
11	ヒタキ科	オオルリ			1				4		1	2	5	1		3	1			1				19	9	25	+10
12	ヒタキ科	コサメビタキ										1												1	1	0	0
	ツグミ科		1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	7	9	7	▲2
	ウグイス科		0	0	0	0	0	0	3	0	0	4	1	1	1	3	10	6	0	1	2	2	1	35	18	14	+17
	ヒタキ科		0	0	1	0	0	0	4	2	2	4	5	4	1	3	2	2	0	1	0	1	1	33	14	36	+19
	個体数計		1	0	1	0	0	0	8	2	3	8	7	5	3	8	12	8	0	2	2	3	2	75	41	57	+34

⑧全観察鳥基礎データ (表2-1)

(黄色地は春の渡り鳥)

No.	科名	種名	4/15	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	4/30	5/1	5/2	5/3	5/4	5/5	種数計 05年	種数計 04年	種数計 03年	04年比 増減	種名	
1	カイツブリ	カイツブリ	3	○	○	○	○		○	○	○	○	5	4	1	6	4	○	1	○	4	○	6	20	18	16	+2	カイツブリ	
2	ウ	カワウ	○	○	○	○	○			○	○	○	1	7	5	1	1	○	1	○	3	○	4	19	13	18	+6	カワウ	
3	サギ	ダイサギ												5									1	2			+2	ダイサギ	
4	サギ	コサギ								○		○						○						3	12	6	▲9	コサギ	
5	サギ	アオサギ		○	○	○	○		○	○	○	○	2	2	1	1	4	○	3	○	4		1	18	13	15	+5	アオサギ	
6	サギ	ササゴイ																							1		▲1	ササゴイ	
7	カモ	オシドリ													2									1			+1	オシドリ	
8	カモ	マガモ	3	○	○	○	○		○		○	○	7	2	1	5	3		1	○	3	○		17	15	9	+2	マガモ	
9	カモ	カルガモ	14	○	○	○	○		○	○	○	○	8	7	2	10	9	○	6	○	8	○	4	20	16	18	+4	カルガモ	
10	カモ	ヒドリガモ			○																			1			+1	ヒドリガモ	
11	タカ	オオタカ												1										1	1	2		オオタカ	
12	タカ	ハイタカ	1		○																			2			+2	ハイタカ	
13	ハヤブサ	ハヤブサ							○	○														2			+2	ハヤブサ	
14	クイナ	バン				○	○			○		○	1	1	1	1		○	2	○		○	2	13		11	+13	バン	
15	チドリ	コチドリ	3			3	1		1	2		2	2		2	2		2	2					12	5	3	+7	コチドリ	
16	シギ	クサシギ							1															1			+1	クサシギ	
17	カモメ	カモメSP																								1		カモメSP	
18	ハト	キジバト	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	32	1	○	10	○	13	○	1	○	5	20	18	18	+2	キジバト	
19	ハト	アオバト										○												1	4	1	▲3	アオバト	
20	カワセミ	カワセミ											1		1		1			○	2		2	6	6	1		カワセミ	
21	キツツキ	アオゲラ																								2		アオゲラ	
22	キツツキ	コゲラ		○		○	○		○	○	○	○	5	2	2	4	7	○	6	○	4	○	4	18	16	19	+2	コゲラ	
23	ツバメ	ツバメ	2	○	○	○	○		○	○	○	○	○	7	3	1	4	○	10	○	6	○	9	20	15	15	+5	ツバメ	
24	セキレイ	ハクセキレイ	○		○	○				○	○	○	2	1			2		1					10	7	10	+3	ハクセキレイ	
25	セキレイ	セグロセキレイ	3	○	○	○	○		○	○	○	○	2	1		1	1	○	1		2	○	2	18	16	12	+2	セグロセキレイ	
26	セキレイ	ピンズイ							○			○	2				1		3					5	3	7	+2	ピンズイ	
27	ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○		○		○	○		○	○	15	1	○	15	○	14	○	18	○	20	18	16	20	+2	ヒヨドリ	
28	モズ	モズ		○		○																○		3	1		+2	モズ	
29	ツグミ	コマドリ																								1	2	▲1	コマドリ
30	ツグミ	コルリ																								1		▲1	コルリ
31	ツグミ	ルリビタキ	1		1		○																	3		1	+3	ルリビタキ	
32	ツグミ	トラツグミ																									1		トラツグミ
33	ツグミ	クロツグミ																								2	2	▲2	クロツグミ

⑧全観察鳥基礎データ (表2-2)

No.	科名	種名	4/15	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	4/30	5/1	5/2	5/3	5/4	5/5	種数計 05年	種数計 04年	種数計 03年	04年比 増減	種名		
			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
34	ツグミ	アカハラ	1						1		1		1		1	2								6	4	3	+2	アカハラ		
35	ツグミ	シロハラ	7	○	○	○	○		○	○		○	2	3	3	1			1					13	10	14	+3	シロハラ		
36	ツグミ	ツグミ	46	○	○	○	○		46	○	○	○	22	25	19	30	11	○			3		1	17	18	20	▲1	ツグミ		
37	ウグイス	ヤブサメ																									2	ヤブサメ		
38	ウグイス	ウグイス	1				○		○				1	1	1								○	7	17	11	▲10	ウグイス		
39	ウグイス	オオヨシキリ																									1	オオヨシキリ		
40	ウグイス	メボソムシクイ																								1	2	▲1	メボソムシクイ	
41	ウグイス	エゾムシクイ							1			2	1		1	1	3						1	7	2	2	+5	エゾムシクイ		
42	ウグイス	センダイムシクイ							2			2		1		2	7	6		1	2	1	1	10	8	7	+2	センダイムシクイ		
43	ヒタキ	キビタキ								2	1	1		3	1		1	2					1	9	4	9	+5	キビタキ		
44	ヒタキ	オオルリ			1				4		1	2	5	1		3	1				1			9	6	8	+3	オオルリ		
45	ヒタキ	コサメビタキ										○												1	1			コサメビタキ		
46	エナガ	エナガ	2		○	○	○		○	○	○	○	3			5			4		3	○	5	14	12	13	+2	エナガ		
47	シジュウカラ	ヤマガラ	○	○		○			○	○	○	○	1			1			1		1	○	1	13	10	10	+3	ヤマガラ		
48	シジュウカラ	シジュウカラ	15	○	○	○	○		○	○	○	○	24	23	15	24	23	○	27	○	21	○	31	20	18	20	+2	シジュウカラ		
49	メジロ	メジロ	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	7	3	11	9	○	7	○	8	○	14	20	17	20	+3	メジロ		
50	ホオジロ	ホオジロ																								2	▲2	ホオジロ		
51	ホオジロ	アオジ	10	○		○	○		○	○	○	○	2	1	3	3	1		5			○		15	14	17	+1	アオジ		
52	ホオジロ	クロジ																								2	2	▲2	クロジ	
53	アトリ	アトリ	8										3		1		2							4	12	3	▲8	アトリ		
54	アトリ	カワラヒワ	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	32	6	16	18	○	10	○	15	○	2	20	18	19	+2	カワラヒワ		
55	アトリ	マヒワ																									7	マヒワ		
56	アトリ	イカル	○	○	○	○	○		○	○	○	○	6	19	5	3	4	○					○	1	17	18	13	▲1	イカル	
57	アトリ	シメ	2	○						○			2	1	1									6	11	10	▲5	シメ		
58	ハタオリドリ	ニューナイスズメ	70	40	40	25	6		201	17	120	60	35	21	2									12	8	5	+4	ニューナイスズメ		
59	ハタオリドリ	スズメ	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	26	1	○	22	○	23	○	19	○	61	20	18	19	+2	スズメ	
60	ムクドリ	ムクドリ	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	5	6	○	5	○	3	○	7	○	17	20	18	20	+2	ムクドリ		
61	カラス	カケス			○				○	○				3			1							5			+5	カケス		
61	カラス	ハシボソガラス	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	9	2	○	12	○	29	○	22	○	37	20	18	20	+2	ハシボソガラス		
62	カラス	ハシブトガラス	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	15	3	○	55	○	22	○	18	○	24	20	18	20	+2	ハシブトガラス		
計			30	25	27	27	27	中止	33	31	26	35	35	32	31	29	30	22	25	21	22	26	25	559	485	507	+74	05年		
			30	27	26	26	25	32	28	32	中止	32	29	23	中止	25	33	19	29	24	26	中止	19	485				04年		
			25	26	25	27	26	22	22	29	29	31	32	33	25	24	22	0	25	25	24	19	16	507				03年		
																								観察した種数	50	48	51	+2		

⑨渡りの小鳥を確認した場所（別図1～4）

1) 別図1 ヒタキ科（オオルリ・キビタキ・コサメビタキ）

オオルリは自然文化園西側、キビタキは自然文化園南側に多かった。両種とも芽吹き始めた落葉樹林など明るい林を好む鳥と思われるが、昨年・一昨年と同様今年も植生との関係は確認できなかった。

2) 別図2 ウグイス科（センダイムシクイ・エゾムシクイ）

センダイムシクイ・エゾムシクイとも、園内の林一様に分布していた。ヒタキ科の鳥と同様落葉樹林を好むと思われるが、植生との関係が説明できなかった。

3) 別図3 チドリ科（コチドリ）

1～3羽程度のコチドリが、調査前からの推定通り水すましの池の噴水からの流れの石畳を餌場にしており、もみじ川や、雨後の芝生の水たまりなどにも姿を見せた。調査開始日4/15～5/2までいたが、上述の通り同一個体群が定住していたか、新しいコチドリと入れ替わっていたか不明である。

4) 別図4 ハタオリドリ科（ニューナイスズメ）

観察した場所から、コナラ・クヌギ、ソメイヨシノなど芽吹き始めた落葉樹林が観察ポイントとわかった。オオルリ・キビタキが好むと思っていた林が、ニューナイスズメに利用されていた。

⑩まとめ

- 1) 万博公園を通過している春の渡り鳥の中でヒタキの仲間は、当初の予想よりは多いとわかったものの、公園内のどんな植生の林を主に利用しているか、3年間の調査ではわからなかった。(ヒタキの仲間が多いのは落葉樹林(密生林でなく疎生林)と予想していたが、実際には園内の林一円にほぼ均等に分布していて、植生との関係が見出せなかった。)
- 2) 大阪城公園の05年渡り鳥のデータはないが、メール情報によると、ヒタキ科・ウグイス科の鳥が多数観察されていたようである。大阪城公園の春の渡り鳥が、万博公園に比し種数・個体数が共に多いという状況に変化はなく、覆すことは出来なかった。
(大阪城公園では、ヒタキの仲間の渡り鳥は疎生林にいて、しかも渡り鳥の多い位置が特定できる場合が多い。)
- 3) 万博公園に渡り鳥が少ないのは？
 - ①渡りのルートから外れている
 - ②箕面など北摂山地が近いので、万博に降りずに山地で休む
 - (③万博に渡り鳥が休める疎生林が少ない)のいずれかと思われる。
- 4) コチドリが好む場所は調査以前からの予想通り水すましの池上流側であること、またニューナイスズメが好む場所は芽吹き直後の落葉樹林であることが確認できた。

注記)本資料は吹田野鳥の会「万博公園の春の渡り鳥調査」結果をまとめたもので、05年調査は延べ64名の協力を得て実施した。